

# 『おばショタの宇宙旅』



うさぎロボ 著

## 一章 さらわれて宇宙船

生垣に囲まれた一軒家。周りの家より少し大きい。広い庭は草が多く生えていて余り手間をかけられていない。

森村ミホコは家の中からそれを眺める。

——久しぶりに庭掃除しようかな？ んー、めんどくさいわね、まあ今度でいいわ。

床に寝転がる。だらしない服装。緩い胸元。寄せて上げる必要などない圧倒的に肉量を誇る女のビーチボール二つが見える。美人といえる顔は色っぽくとろんとしており、捲れたシャツから見える腹は段がしっかりできている。太っているというより、加齢で肉が付いて来ている感じだ——それを太っているというのだろうと言われたら反論しようがないが、もともと太っているタイプではなかったという話である。

ミホコもそろそろ四〇代に達そうとしている。子供は二人。二〇で産んだ下の子供もついに高校を出て大学に入り、一人暮らし中だ。

と、スマホに着信。座卓の上。

転がって行って取る。同じく主婦の石江サナという友人からだ。

「はいはい、そうそう、寝てんの。っていうか、聞いてよ？ また二人になれば、年単位のご無沙汰も少しは……と思ったけど、全然なんでもね。もう、あの人のアレ、立たないんじゃない？」

『そんなことないって！ 絶倫だーって、昔言ってたじゃん』

スマホの向こうの声。

昔その惚気を聞いて、興味を持った彼女は前から知り合いだったミホコの旦那にちょっかいかけ、馬が合ったのかそのままずるずる付き合っている。

数日前もサナの家でしっかり行為に及んでいた。

そんなことなど全く知らないミホコは苦笑いで頭を振る。

「そりゃ若いころの話っすよー、もうあの人は四〇代だしさー。あは、でも案外愛人とかいて、そっちは立ってたりして……んなわけねーか。っていうか、あったら……」

年単位見ていなくても、はっきり思い出せる旦那の股座のモノを思い出す。

棒と玉があるが、玉の方を。

『そりゃミホコさん、そういう場合はあれよ、キ〇タマ握り潰しよ、握り潰し。今はさ、ナノメカでキンキンぐらい一瞬で治るんだし……』

彼女らが暮らす世界は大体現実と同じ程度の技術力だが、ナノメカによる身体再生だけ異常に発達した世界だった。

『浮気するような旦那はお仕置きでキ〇タマ潰しちゃえ潰しちゃえ』

自分が浮気相手であると悟られないためにあえて言っているというのもあるが、根本的にサナはサディスト寄りの人間だった。

彼女の夫はノーマルだが、ミホコの夫はマゾヒスト寄りの人間で、彼女が睾丸マッサージという名目で玉を揉み潰すと止めてくれと言いつつ、ギン立ちになる。

ミホコにはそういう趣味はないのが、旦那がサナとの浮気を続けている理由の一つかもしれない。

『なんなら、私がしてあげるよ、キ○タマキーク、キックキーク、昔から好きなんだ。いつも威張ってる男が、男にしかない部分を女に蹴られて「はぐう」とかいう間抜けな反応するのを見るのが好きで好きで』

「ドSねー相変わらず。っていうか、あんた自分が蹴りたいだけでしょ。旦那の蹴ってあげなよ」

『もちろん機会見つけてグチョグチョいってるよ。っていうか、あの玉は私のなんだから、蹴りたいときに蹴らせてくれりゃいいのにとってるよー』

「ほんとヤバいわねー」

笑いつつ、ふと外を見る。

生垣の間から、何かが出てくる。

周りをびくびくと疑いつつ、一〇歳になるかどうかの少年が出てきた。

「あれ？ あの子」

『え？ なに？ よその子が庭に？』

「そうなのよ。通り道だけど、困るわね」

気弱そうな少年。周りを気にしつつ、ズボンの前に手をやる。

「あ、やだ……その子、おしっこしそうなの」

『シャッターチャンス、かわいいポークビッツの写真は後でちゃんと送ってね』

「ぎゃはは！ ヤダもう、そんな趣味ないって」

笑いつつ、カーテンの隙間から外を見る。

——やだわ、近いし、高さもあってるから、割と目の前みたいじゃん。うふふ、出た出た、可愛い……

「ひっ」

『え？』

「しゅ」

『しゅ？』

「しゅごいできゃい……」

『ええ？ うっそ、大きいほう？』

「ちが……チン○ン、でっかいの」

『ああ、年の割には？』

「違うわ、巨根よ巨根！ 超でっかいの！ 大人としても特大サイズよ！ 小柄な坊やだから、膝の下までぶーらぶら！」



実際には、愛人と満たされているので妻としないということも考えられるので、無いわけではない。が、表向きはない。

聞きつつ、首をひねる。

——なんだこいつ……マジで怪しいんじゃないか？ って、ていうか……

「ジョボジョボって、モノがデカイから水も、水もぶっとく出ていくよ！」

『いや、なに説明してくれて』

ブツ、と通話が切れる。

「あら？」

首をひねる。捻りつつ、外を見て驚く。

巨棒。

やっと水も出終わったそれが、上を向いていた。といっても、立っているわけではない。

周りの庭石なども、上に引き上げられている。

「え？ 嘘」

ふわり、とミホコも浮き上がる。

天井に向けて。

といっても別に叩きつけられたわけではなく、ふわっと一瞬浮いただけだ。

窓の外に異変。

ふっと家の周りが見えなくなったかと思うと、鉄の壁が現れる。

彼女の家と周りの地面が、周辺からごっそりと切り取られ、別の場所に移動させられていた。

が、そんな異常な出来事が起きたと、部屋の中から見えていてわかるわけがない。

上に引き上げる力が切れ、床にどさりと落ちる。

一瞬息がつまるが、寝てもいられない。

「外が……」

窓の外を見る、と、少年。

「あら」

「あ、ごめんなさい！ ひ、人がいたなんて……その」

「いいのよ、そんなことより……」

「そんなことより？」

「大きいわねえ、男らしいわ」

「え？ うわっ！」

顔を真っ赤にし、何もしていないのに人並み外れた重さのせいかわらぶら揺れる巨棒を慌ててズボンの中に押し込む。

——良く入るわねー。

思いつつも、からかってなどいられない。

とにかく、サンダルで床に出る。

空を見て驚く。

天井だ。

鉄というか、銀色っぽい金属の板。

周りも四方そうだ。

「こ、これは……」

「う、宇宙船？」

「宇宙船？ どういうこと？」

「いや、宇宙船の中に捕まったのかと」

「ん……」

——いやいや、なんでこんな倉庫みたいな建物の中なら宇宙船の中って話になるのよ？

実際、少年の直感はその通りだった。

直感というより、昨日読んだ漫画にそういう話があっただけのことで、予想でもなんでもないが、とにかく当たっていることは確かだった。

庭木から見えない場所にある扉というか、シャッターがシュッと音を立てて開く。

そして四角い金属の塊が入ってくる。

これといった飛行機械がついているようには見えないが、ふよふよ浮いている。

この宇宙船の中も無重力のはずだが、一定方向に重力が発生している。この宇宙船を作った者たちは重力をある程度操る技術を持っているわけだ。

それで、その金属も浮いている。

大きな生命反応に向けて飛んでくる。

気づいて、飛び上がる少年。

「え？ うわっ、おばちゃん、これなに！？」

「え、ど、ドローン？ っていうかお姉さんでしょうが」

「え？ お、お姉さん？ でも」

「でも？」

ニコ、とほほ笑みつつ目は笑っていない熟女に見下ろされ、へラっと笑う少年。

「お、お姉さん。これなに？」

「ドローンかな？」

見る。

一体成型のように見える金属の塊。

と、こめかみを押さえる少年。一瞬後、ミホコ。

「そ、そんな……」

現状について、金属の塊がテレパシーで語り掛けてくる。

一見機械のような金属の塊だが、中には脳が入っている。普通の生き物が脳を移植したわけではなく、もともとテレパシーを使わせるために人工的に作られた生体脳だ。つまりはその金属の塊は量産型のサイボーグといえる。

その金属の塊から頭に伝わってくる内容は二人を驚かせるに十分だった。

「嘘でしょ、もう帰れないの？ そんな……生き物の多様性を保つためって、そんな勝手な……」

金属の塊は、言葉が通じないので意味を伝えてくる。

その意味は、要は彼らの主がある種の慈善事業として、宇宙全体に様々な知的生命体を広く分布さ

せようとしているという話だ。地球の人間もそうして他の星に「分布」されるのだという。

はるか遠い星に移し、そこで繁殖させれば地球が隕石などで吹き飛んでも人間は残る。

元が二人だけではすぐに近親交配の問題が出そうだが、そこは遺伝子を僅かに変容させる薬があるので問題ないという事だ。

保護された先では、もちろん衣食住に何の心配もなく、死ぬまで繁殖だけしていればいい。

それだけで、地球が滅んでも人間は全滅しないで済む形になるという。

いい話という気もするし、地球がなくなって単に「人間」が他所で生き残っていてもあまり意味がない気もする。

地球の人々がそれを知らないならなおさらだ。

だがまあ、意味がないとも言い切れない気もする。

ただ、そのための「繁殖させる」男女として勝手に選ばれ、二度と地球に戻れない立場に置かれた人間としては、意味があつてうれしいなどはとても言えない。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 子供もいるのよ！ 帰してよ！」

もちろん、金属塊はわかりましたなどとは言わない。

そんな権限はない。

エネルギーも物資も別にギリギリではなく、ミホコらを下ろして別の人間を回収しても問題はない程度の量はある。

ただ、断られた場合を想定していないから金属塊の主が、金属塊にそれを受け入れる権限を与えていないというだけだ。

それは相手が喜んで受け入れてくれると判断しているわけではない。

ただ相手の意志などどうでもいいというだけだ。

金属塊の中に入っている脳ミソ。それはそういう形で、サイボーグの核にするために人工的に作られた生命でそれ以外の意味は何もない。そういったものを作り、量産して使い続けられる高度な種族にとって拾い上げてほかの星に広げてやらないと隕石一つで全滅しかねない生き物の意志などあるのかないのか考えてすらいない。

いや、考えてはいる。

「帰りたいよ……あ、やっぱり別に帰りたくないかな」

泣きそうになる少年。が、すぐにキョトンとした顔になる。

ミホコもだった。

「そうね、別に帰る必要ないわね」

金属塊の中の脳のテレパシーによって精神を操作され、現状を受け入れるように調整された。

それが、高度な種族によるある種の配慮だった。そのテレパシーを使わせるためにわざわざ生体脳を部品として使用しているのだ。

生体脳の方の精神はもともと「こういう」生き物として初めからそうあるだけで、特に何の疑問も苦しみもない。

そういった形で、この宇宙船に乗っている高度な知性を持つ三体の生物の精神は健康を保たれていた。

テレパシーで操られて無理やり「問題なし」と思わされたり、部品として作られて生きている状態に「元からそうだから」と問題を感じない状態。

それは客観的には無茶苦茶な気もするが、三人の主観的に何の問題もなく——というか問題を感じないだけというべきかもしれないが——トラブルが起こらない状態さえ保てるなら「問題なし」と判

断するのが、この状況を整えた高度な種族の考え方だった。

銀色の物体は、定められている手順をたどる。

倉庫の外には地球にある様々な物をコピーできる冷蔵庫ぐらいの箱が置かれている。

銀色の物体は出したいものがあるなら出すようにという意味を伝え、使い方を伝える。

表面のパネルに手を置き、欲しい物をイメージすると出してくれるという便利なものだ。

便利過ぎる。イメージを読み取るなど宇宙船より高度な技術ではないか。

まあこの宇宙船にどのぐらい高度な技術が使われているのかはよくわからない話だが。

聞くと、目を輝かす二人。

「なんでも出るの？ 便利ねー」

「本当に何でも出るのかな？」

「そりゃ出るわよ。こんな宇宙船に、私たちが浚ってこれる宇宙人が作ったものだもん」

「そうだね、やったー！」

言いつつ、一瞬目が真剣になる。

——いやいや、僕ら、浚われたんだよ？ やったーじゃないじゃん……いや、別にそれはどうでもいいんだ。浚われたのがどうでもいいなら……何でも出る箱を使っていい状態は喜ぶべき状況だ。なら、やったーでいいんだよな……

操作されている。

常時操作を受けているわけではなく、特定の方向に思考がいかないように紐をつけられている感じだった。何かの拍子に現状に本来感じるべき気持ちが出てきても、すぐに引き戻される。

「カレー食べたいな」

「いいわね、カレーにしましょうか。そうだ、カレーのステーキ乗せでもどう？」

「わ、豪華！」

盛り上がる二人。別に親しくなるように調整はされていない。ただ、現状を受け入れようが入れまいが、二人が争う理由はない。

そして受け入れて精神的に安定したなら、まあ親しげにはするだろう。

そんな二人に、金属塊が一瞬光を当てる。

核である脳の中に、スキャン装置から入ってきた情報が映像として浮かぶ。

二人の姿。

服が消え、全裸になる。

まずはミホコ。

下着で支えられなければ重力で思いきり下にひっぱられてしまうだろう巨大すぎる乳房、二人子供を産み、まだ必要なら何人でも産める女の部分。むしろ熟れに熟れて前よりスムーズに行けるだろう。

一方少年。成熟には程遠い華奢で細い体。しかし細い太もの間では、船をひっぱる極太鉄線のような何かがパンツの中で丸められて押し込まれていた。

両者の股間をさらにサーチする。

熟女の内部構造。

少年のまとめられた巨棒と巨玉を本物となんの違いもない3D映像で再生し、ぶらぶらと揺らさせ、しっかりとモノを確認する。

確認の後、彼らの文明の文字が金属塊の視界の中に浮かび上がる。

雌生殖器、発育良好、授乳器発育極めて良好。

雄生殖器、発育良好、挿入具発育特に特筆して極めて良好、やや巨大すぎも成熟した雌には使用可。

そんな意味の文字が浮かび上がり、問題なしと判断すると金属塊は引き上げていく。

さらう前に同じ検査をしているが、そこが最も重要なので念のための検査を行ったのだった。

極めて良好な部分をゆさゆさ揺らしながら、少年の背を押して歩くミホコ。

二人の長い旅が始まる。

## 二章 船の中で

暇である。

宇宙船の中の倉庫に取り込まれたミホコの家。

ミホコと少年は退屈していた。

先行きへの不安だの、家に帰りたいたいの、家族と別れて辛いだの、友人に会いたいたいの、そんな感情をすべて封鎖された状態なのでただ退屈としか感じようがない。

封鎖され、なにかの拍子にそういう方向に思考が行くとすぐに引き戻されるように調整されている。

立ち入り禁止区域を柵でふさがれた上に自分も紐でどこかに繋がれているような執拗さだ。

少年、溝口文平。

二人きりで延々長時間過ごすのだ、仲良くならざるを得ない。

暇つぶしにゲームでも出せばいいのだ。電気も水道も不思議な技術で家に供給されている。

が、ミホコはゲームなどしないタイプで、文平も物を出す冷蔵庫は基本食べ物を出すもので、暇つぶしのおもちゃなど出せるとは思っていなかった。

となれば、二人で遊ぶしかない。

なんとなく縁側に並んで座って話している。

「それじゃ、今度はクイズでもしよっか文ちゃん」

「そうだね、それじゃ……」

「指さしクイズね。指さしたものの名前を言うの」

「じゃ、これ」

「机。それじゃ……」

本当に他愛ない暇つぶし。文平の年齢を幼く見積もり過ぎではないかと思える。

が、少し続けるとミホコの狙いがわかる。

「じゃ……これは？」

「あっ」

文平のズボンの前をプニッと指で押す爆乳女子。

顔を赤らめる巨根シヨタ。

「その……」

「いけない？ これよこれ、文ちゃんがよく知ってる物よー」

「や、やめてよお姉さん」

「うふふ、降参ね？ それじゃ答えいうわ」

ぺろりと唇を舐め、真っ赤な少年の耳元に口を寄せる。

「よく聞いてね？ 恥ずかしいけど、ゲームだから言っちゃうね？」

「う、うん」

「正解は……」

掴まむ。ズボンの布を。

「ズボンよー」

「えー！ そんな！」

「きゃはは、なんだと思ったの？」

「その……」

「文ちゃんの、立派で長ーいおチン○ンかなあ？」

「そ、そんなことないよ」

「あるでしょ。さっき見たぞー」

まだ二人がさらわれた日である。

豪勢なステーキカレーを食べ——ミホコはきついのでただのカレーにしたが——自己紹介したり、倉庫の中を一緒にうろついたりしている間にもう数時間経った。

それでも、地球で文平の立ちションを目撃したのは「さっき」でしかない。

「ぶーらぶらだったよ。うふふ、大きかったあ」

「やめてよ、皆にからかわれるんだ」

「あは、そりゃね、話題になるでしょ。大きいもんね。巨根くんだもん」

「巨根……」

「大きくて立派なチン○ンのことよ。あら……」

——ヤダこの子、ズボンの中で、立ってきちゃった。仕方ないわね。普通なら気づかないぶりだけど、もう地球にも帰れないんだし、遊んじゃってもいいよね。……地球に帰れない……う……いや、別に、どうってことないわよね。

一瞬気が遠くなるが、今日調整されたばかりだ「どうってことない」という考えは揺らがない。

胸元を緩める爆乳熟女。腰をもぞもぞさせつつ座っている少年。

「うふふ、おチン○ン苦しいでしょ？ 楽にしてあげるわ」

「べ、別に……あ」

立ち上がり、庭にしゃがむ熟女。緩めた胸元から、谷間が見える。寄せて上げずともびっちり肉厚の谷ができています。視線に気づきつつ、少年の股間に手を伸ばす。慌てて後ろに下がるが、すぐに掃き出しのアルミサッシに当たる。

「うふふ、ほれほれ、苦しいでしょ……あひっ！」

前を緩め、巨棒を自由にする。

するや、彼女の頭を吹き飛ばそうとするかのように勢いのある突きを放つ木刀。

仰け反り、顔を赤らめる熟女。ゆさりと揺れる肉スイカ二つ。

「あ、あ……なんとまあ……想像以上に超デカいわ」



自身も超デカイ物を揺らしつつ、熱い息を吐いて巨棒を見つめる熟女。

その視線にドキリとしつつ、顔を真っ赤に目を泳がせる少年。

「そ、その、ごめんなさい」

「謝らないで。うれしいのよお姉さん。男の子のこれが、ビンビーンになるのはね、女の子のエッチパワーによるの。エッチパワーが強くて、お姉さんうれしいわよ」

「でも」

「うふふ、男の子なんだから「でも」は無し。君だって付いてるんでしょ？ エッチ玉！ あらま、こっちもまあ、種馬あ」

「あうっ、そ、そこは」

ズボンの中に熟女の手が入り込み、男のエッチ玉を野球ボール二つを握るようにながしり掴まれ、思わず腰が浮く文平。

もぞもぞと血管の透ける肉袋をまさぐる熟女の男を知っている手。

膝を締める文平。

「そ、そこは、そこは……」

「うふふ、弱点なんだよね？ 男の子の。この、たーまたま、は！」

目を輝かせ、恐怖と不安と不思議な興奮に悶える少年を見下ろしつつ、久しぶりの性的興奮に体温が高まるのを感じる。股間をもみながら、再び横に座る熟女。

文平も、グイグイ密着してくる年上女性の豊満すぎる体が熱くなるのを感じていた。

——こ、こんな、だめだよ。こんなことしちゃ。おばちゃんが、触ってくる、僕の……タマタマを、弱いところを。知ってる、おばちゃんはちゃんと知ってるんだ、男の体のこと、もしかしたら男の僕よりも……うう、熱くなってくる、おばちゃんの体。僕もドキドキして、体温上がってきた、おばちゃんもドキドキしてる？ あ、なんか、心臓の音が聞こえる……興奮してるの？ おばちゃんも、もしかしたら僕の……変なところ、触ってるから？

唾を見つつ、目を泳がせる、背丈が違うので、もう谷間を見下ろすのは無理だ。

「ね、文ちゃん、お姉さんのオッパイどう思う？」

「え、どうって……お、大きいと思う」

「大きくて？ どう思う？ エッチかな？」

「お、お姉さんのオッパイ、大きくてエッチだよ」

「ありがとう。さすがおチン○ンが大きくてエッチな文ちゃんね、よくわかってるわ！ えい、チン○ン触っちゃう！」

「あうっ」

細くて柔らかな女の指が、文平自身の拳のように大きいパンパンに膨らんだ巨棒の先端部とガチガチの茎の間を首を絞めるように掴む。なめらかな掌がぺたりとついてもまだ小指が棒の根元に当たらない。すううう、としばらく下ろしてやっと根元。再びすーっと持ち上げる。長い、手で触れるとみている以上に長いのがわかり、絶句するしかないミホコ。彼女も相当数握ってきたが、ここまで長大な物は珍しい。

——手コキの時にどうやって握るかで男らしさを測るなんて馬鹿らしいけど……やっぱりこうやって遠慮なくマイクみたいに握れると「ああ、雄だな」って思っちゃうよね。これが親指と人差し指のリングでないと上下する幅がないとかだと……やっぱり内心「短くね？」って思っちゃう。もちろん、口には出さないけどね、大人女子ですから。

雄を感じつつ、上下上下。シュッシュッと滑らかな肌が血管の浮いた雄肉をこする音が響く。タブンタブン、揺れる揺れる。上では爆乳、下では巨玉。ずっしり二つセット四つの球体が揺れる。

「あ、あっ」

目を瞑り、はじめは閉じようとしていた足を今は思いきり開く文平。少しでも快楽を受け入れようと必死のようだ。それを優しく見下ろしつつ、ミホコは片手で男を楽しませ、片手は我知らず自分の股間に。肉がついてきたせいで否応なくタイトになってしまったスカートの中に滑り込ませ、飾り気のないパンツをずらす。慣れたものだ。結構幼い時から自分でしている。男ができるようになってからはあまりしなくなったが、結婚してしばらくし、レス気味になってきてまた再開した。

——旦那がいるのに何で……キ○タマ握り潰してやりたいって思いながらやったこともあるわ。

物騒なことを考えつつ、女の割れ目を指で撫でる、じつりと湧いてくる雌蜜が外まで濡らしている。小指とは言わないが、なかなかの大きさの女の豆を摘まみ、皮ごと巧みに刺激する。

「あっ、きもiiiiい……なんで……あ、そうか」

片手で大物をしごいている。横でかわいい男が自分の手で気持ちよさそうにしてくれているのだ、一人でただやるより気持ちいいのも当然。

目を瞑り、腰を浮かし、卸を繰り返す。あうあうと幼い喘ぎを挙げ続ける。

はあ、と熱い息を吐くミホコ。

——ああ、もっとかわいがりたい。なにこの反応。かわいいかわいい、チン○ン入れてほしい。ああ、両手でかわいがってあげたい。タマタマも揉んであげればもっと気持ちよくしてあげられるけど、自分も楽しみたいし……早くいっちゃおうか、とりあえず一回いっちゃおうか、それからこの子を…

…

「あっ、あっ、あっ」

くにくにくに、女だからこそわかる女の気持ちよさ、自分の体だからわかる自分の気持ちよさを最大限に追求し、雌豆を巧みに摘まみ、押し潰すようにグニグニと刺激し、同時に雌穴に指も入れて津ブツブと出し入れ。

——ああっ、全然足りないっ、もっとぶっといの欲しいいい、ペ○スペ○ス、デッカイペ○ス…  
…ここにあるのにつ。

引きつった雌顔で見下ろす。目を開けていれば大人の女の本気の性欲にドン引きしただろう、ギン立ち巨棒も瞬時に屁垂れたかもしれない。

しかし幸いなことに、目を瞑って楽しんでいるので平気だ。

ともかく、ミホコが手の中の巨棒に跨らないのは、怯えさせてはこの後の事に支障が出るかもしれないと思っているからだ。段階を踏んで啜え込んでいかないと、怯えて立たないのでは文字通り役に立たないではないか。

だがその理性も限界に近づいていた。

——何とかもっていかないと、本番に！ そうね……これでどうかな。

手コキを続けつつ、片手で服を脱ぐ。

瞬間に全裸。スレンダーな美人が年齢と贅肉を全身に纏った爆乳熟女。元から大きかった乳房は爆乳といえるほど成長したが服がないと垂れすぎ、腹や尻、二の腕の肉もつき過ぎだ。だがそれがいかにもエロに特化した体のようで「恋人」としてみるなら引いても「セックスの相手」としては若い女よりはるかに上に見える。

それが巨棒から手を放し、立ち上がる。

「え……？」

手コキが止まっても、目を瞑ったままの少年。すぐ再開されると思っているのか。

その気はない熟女は縁台に立ち、しゃがむ、ガニ股で、少年の前に股間を突き出す。

前というか、庭に向いて座っている少年の前には立てないので、横に立つ。

「うふ、こっち向いて、目を開けてみて」

「なに……え、これなに？」

ガニ股で股間を見下ろす熟女。その前にいる少年の顔が驚きと恐怖に歪むのを見る。

「グロ……」

「うふふ、怖いかな？ ここが女の一番大事な場所よ？」

「え？ うわっ！」

見上げて、タップついた腹、月が落ちてきたような巨大な乳房に気づくと、文平は顔を真っ赤にする。

目の前の物が何なのか理解したのだ。

「うわ、そんな……ええ」

「ん」

——怖がって逃げちゃう？ あ、よかった！ ガン見してくれてるわ！ さっすが、付くもん付いてる男の子！ デカ金ブラブラ伊達じゃない！ ナイス性欲！

目を見開いて正面を見る文平。二人もの命を生み出した女の割れ目。左右から女の部分を包み込む肉厚、中から広がる赤黒い花びら、ひくつく女の穴、特に命の穴を見ると本能で一物がびくりと痙攣する、そこに入れると体がわかっているようだ。さらに膨らむ雌豆をことさら不思議そうに見る。

その目線に期待の目を向けつつ、落ち着いた声を出す年上女子。

「触っていいのよ？」

「い、いいの？」

「いいよー！ こうやって掴まんで、グニグニするのよ。あっ」

「こう？」

もともと気弱な少年。それが初めて触る女の部分に対するなら必要以上に優しくゆっくりいく。羽で撫でるようにゆっくり来られ、不意に走った快感に舌を突き出すミホコ。

「あうっ、そ、そうよ、そんな感じで、優しく……」

——やば、気持ちいい、なんて優しく触ってくれるの。うますぎでしょ……っていうか、ビビってこういう感じになってるんだろうけど、結果オーライ過ぎる……これに比べたら、慣れてるつもりのパカガシマンとかはもう金的蹴って踏み潰すしかないわ……ああ、ヤバい、ヤバいよ、ガニ股で立ってるのは無理があるわ、私体は軽いけど、オッパイ重すぎだから。

「あっ、あっ、あっ、あっ！」

仰け反り、声を上げるガニ股熟女。股間にむしゃぶりついていた文平はビクッと顔を離し、指を止める。爆乳越しで良く見えない顔を見上げる。

「え、大丈夫？」

「大丈夫……っていうか、もっとして、気持ちいいよ……あおっ」

「こう？ こう？」

「あへへええ！ おほおおお！ そう、うまいよ、うまいよ文ちゃん！」

座っている小柄な少年相手とは言え、股間をその顔の位置に固定するのは相当足腰に負担がかかる。が、その負担が逆に快感を高める。

「あお、あおっ！ ヤバい、ヤバいっ、足が、足に力がっ」

必死で体勢を保ち、手マンを受け、気持ちよさに爆乳を揺らし、へこへこ腰が動くのを押さえる。

若い娘なら我慢できないような涎や涙、鼻水でいっぱい顔で舌を突き出し熟女らしい手加減無用のガチアクメの片鱗を見せる。

見せるといっても、その場にいる唯一の人間である文平は股間に食らいついて一心不乱に手マンするのみだが。

と、ガクリと熟女の足の力が抜け、縁側から部屋の中に倒れ込む。ブルルン、と肉が揺れて、衝撃を受け止めてくれているように見えるがまあ痛いことは痛い。

が、力が入らなくなるほど手マンで快感を与えられていた熟女には多少の衝撃など通じない。

「うわっ、おば……ねえさん！」

「うう、もう……我慢できない」

言いつつ、足をピンと指まで伸ばして空に突き上げる。空はない、宇宙船の中の倉庫だが。

足を開く熟女。当然、女の部分をガン見する少年。

「文ちゃん、すごくうまかったよ！ もう一人前の男だと思うわ！ 次の段階に進むわね！ 進むわね！？」

「え、う、うん」

「今度はね……ここの穴の、ここにね……ほら、しゃがんで顔近づけて」

「う、うん」

足を下す熟女。その間に膝をつき、顔を股間に埋めるようにする少年。

その素直な少年に自分の女の部分を指で示しつつ、ひかれるのではないかと少し不安も感じる。

「ここに穴があるよね？　これはおチン○ンを入れるような穴なの」

「え、ウツソ。入るわけないよ」

「あは、それは文ちゃんのが大きいからそう思うの。ほら、指で広げると」

「わっ、ひ、広がる」

目を剥き、顔をさらに近づける。熱い息が尻のあたりに吹き付けられる。ひかれるかもという心配が、その食いつきによって消える。

——凄いガン見してくれてるわ。息も荒いし。うれしい……

「そう、柔らかいのよここは。普通の男の人なら余裕で入るの」

それは彼女のそこが百戦錬磨だからというのも十二分にあるだろう。

「文ちゃんのもオツケーよ、だからこれから入れさせてあげるわ」

「い、いいの？　きつくない？」

「きついのがうれしいのよ！　大きいのが入れられてるなーって、さ、早く！　うふふ、おチン○ンまだピンピンで話が早いわ」

「そ、それじゃ……」

「そう、膝立ちで。君はチン○ン長いから、それに合わせてちょっと離れて……そうそう、それで先っぽを」

手を伸ばし、モノの先端を女の部分にあてがう。

「これで、腰を前に……あっ、おぐっ！」

仰け反る。

ぬぶっ、と本当に音がしたのではないかと思えるような調子で本人の腕より明らかに太そうな巨棒が熟女の雌穴に押し込まれる。

「ちょ、ま、ま、マ○コ裂けるっ……あっ」

最も敏感な部分に、恐るべき凶器が入ってくる。予想以上のその巨大さに恐れわななく熟女。しかし恐れつつも、同時に期待と喜びに震えてもいた。

そんな細かい女の表情など、少年は見えていない。

「な、なにこれ、なにこれ！　気持ちいい、気持ちいいよ！　あったかくてヌルヌルで、ああっ！」

ほとんど白目を剥き、夢見心地で涎を垂らす文平。仰け反りつつ、腰を突き入れていく。相手が死にそうでもそのまま無我の境地で突き込みそうなほどの悦楽に支配されていた。

ボコオっ、と腹が膨らんだのではないかとミホコは錯覚した。それほど女の部分を広げる巨棒の感触は今まで受け入れてきたものとは異質だった。

目を剥き、歯を食いしばるミホコ。

「ぐふっ、ちょ、キツ……あ」

本能。

本能で動き出す文平。ずにゆうう、と音が鳴るほどの勢いで巨棒を引き、勢いよくつき込む。根元まで遠慮なく。

目を剥くミホコ、期待が二割、恐怖が八割ではないか。

「あうっ、ちょ、ゆっくり、あ、あっ、裂け、マジ裂けるっ、デカすぎっ、デカすぎっ！」

ぬぶぬぶぬぶ、激しく腰を振る文平。小柄な体に超巨大なモノが付いている、快楽を貪ろうと自分の巨モノを思いきり振ると狂ったように激しく動かざるを得ない。膝をついて腰だけの前後ではとても無理だとすぐ体が理解する。するや、膝を上げて中腰めいた形になり、バランスをとるのに思いき

り膝を左右に開く。ずっしりと巨玉が股の間に垂れ下がる。それを文字通りの玉掛けよろしく前後に振りながら、腰を叩き付けるようにモノを突き込み巨頭で雌穴を広げ、また爆弾から逃げるように素早く引ひいて巨頭の首でゴリゴリと雌穴の内側を削る。

ずにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆ、パン、ずにゆにゆにゆにゆにゆにゆ、パン、異様に長いネットトした淫猥な音の後、激しく肉を打つ音、そしてまた肉が粘っこく絡みつく音が長く響く。

涎を垂らし、絶叫する文平。

「おばちゃああん！ んあ、んあ、んああああ！ 気持ちいいよ、おばちゃんの中気持ちいい！」

「ん、ん、ああっ、やっと、楽になってきた……ってというか、気持ちいい、お姉さんも気持ちいいよ！」

宇宙船に取り込まれた一軒家の庭と一室に命の喜びの音が響く。

長い出し入れ音、乾いた音、文平はゆっくり動いているわけではない、モノの長大さゆえに出し入れの音が長いのだ。が、途中で何かに気づく。

「ん……ああっ！」

「え、あおおっ！」

パンパンパンパンパンパンパンパン、外に出す茎の長さを常人の全長程度に抑えることで、素早く出し入れできることに気づいた文平。

目を剥く熟女。

「あっ、あう！ す、すごいピストンっ、死ぬ、こんなのっ、もっとおおお！」

「あう、あう、き、気持ちいい……このほうが動きが激しくて気持ちいい」

「あっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ！」

体重で言えば冗談抜きで三分の一ではないかと思える少年にズンズン腕のような巨根をねじ込まれ、涎を垂らして悶え始める熟女。

「うぐっ、うぐっ、死ぬ……死ぬかもっ、殺してっ……」



腰を浮かし、太ももで小さな体を挟み込みながらぴんと膝を伸ばし、足首から先も伸ばし、指をびくびくと引きつらせる。

「おっ、おおおっ、しゅごいっ、文ちゃんのデ○チンしゅごいのおおお！ もっと、もっと……あっ」

グイ、と腰を一際押さえつける文平。そのまま、巨棒を痙攣させる。

「ふぐううっ、でる、でるっ、何か出る……あ、あ、ああああ！ と、溶けるっ……タマタマがああ！」

ぎゅぎゅう、と肉玉が引き上げられ、肉袋が引き締まる。熟女の中に大量に放出される粘液、出る出る、異常な量に、睾丸が溶けて出ていると錯覚するほどだった。

「あ、ちょ、まって、まだ……ああ……出して、思いきり出していいのよ」

まだ楽しみたかった、と思いつつも、背を反らして白目を剥く少年の頭を抱きかかえ、撫でる熟女。

おいおい、出すの早すぎんよ！ この早漏が！ などというほど若くない——というか若い子でも言わないか。

暫くのち、ぐったりする少年。爆乳に顔をうずめ、荒い息。

しかし、ミホコは自分の中のモノがガチガチなのに気づく。

「これは……まだ行けるんじゃない？」

「う、ううう」

「ね、文ちゃん、もう一回動ける？」

「う……うん……動けるよ」

言われて、動けることに気づいた絶倫ショタ。

巨玉に恥じない精力で、間を置かない二回戦目を始める。

ずにゆにゆにゆにゆ・ずにゆにゆにゆにゆ、パン、ずにゆにゆにゆにゆ・ずにゆにゆにゆにゆ、パン。長物をギリギリまで出し入れするゆっくりのピストン。

ゆっくりに聞こえるが、速度としては普通だ。

その出し入れで、巨大な先端物によって大量に流し込まれた粘液がブリブリと音を立てて掻き出される。

「え」

一心不乱で出し入れする少年は何の関心も持たない、一物から伝わる温かさ、締め付け具合、場所によって違う粘膜の刺激に集中して、音などほとんど聞こえていない。

が、慣れている熟女の方は、射精時に待たされて少しクールダウンしたので音を聞く余裕もある。

顔を赤らめる。先ほどから性交の興奮でほんのり赤らんでいたが、また違う意味で赤らむ。

「ちょ、やだ、なにこの音……どこから……ええ、やだ、エッチ汁が……私から出てる音？ カリが立派過ぎて、自分のを掻きだしちゃうんだ。もったいなさすぎるわ……もう、大きいのも善し悪しね」

爆乳が邪魔で見づらい自分の股間をどうにか見下ろしつつ、頬を引きつらせる。

見ながら、唾をのむ。

「す、すごい出し入れしてるわね。見れば見るほど……こんなの良く私に入るわね」

「おねえさん、おねえさんっ」

「うふふ、頑張れ頑張れ。初ハメ大成功だぞ」

「ん」

よくわからない文平。だが何か誇らしい気がする。

「あ、チン○ンがさらに大きく……あ、あっ、またスピードアップね……頑張って頑張ってっ」

「ん、ん」

パンパンパンパンパン、出し入れの長さを半分以下に落とし、素早く前後する。

ずっしり巨玉が小ぶりな少年の尻の動きに遅れて前後に揺れ、熟女の肉付きが良すぎる尻にペタペタと当たる。

流れる二人の汗が交じり合い、もつれる手足、こすれる腹をヌルヌルと滑らせる。淫水の交じり合う匂いに息を詰まらせながら、少年はさらに腰を激しく前後させる。

「ふっ、ふっ」

「あっ、あっ、いいわっ、また上がってきた……でっかい金の玉が……今度はいかないで、今度は頑張ってる……」

「う、う、あ、ま、また……」

先ほどよりは二回目なのである程度持つが、やはり熟女が満足するまでは持ちそうにない。

となれば、そこは慣れている熟女だ。

「あ、あん、ううん」

目を瞑り、集中する。本来より強め大きめに喘ぎ、自分を盛り上げる。

それでもやはりショタのつたないピストンで短期間となると絶頂まではいけないが、それなりに楽しむことはできる。そしてショタが腰を押し付け、二度目の放出に入ると。

ぎゅう、と足で小ぶりの尻を抱える大しゅきホールド。

「ああっ、いくわ！　いくっ！」

「あ、あうっ、締まるっ、チン○ン締められるううう！　むぶっ」

爆乳に顔を押し付けられる。

抱きしめられ、巨根を熟女の奥の奥までねじ込み、睾丸が溶けて流れ出していると思えるほどの量の粘液を中に流し込む。

「むぶううう」

「ああっ、いっちゃう、いっちゃうううう！」

達したかのような叫び。

だが、まだ達していない。

演技といえば演技だが、勢いで本当に絶頂に達すれば、という期待からの叫びだ。

が、やはり無理だった。

それでも、楽しめはした。

ぐったりするショタを抱きしめ、雌穴でまだギンギンの巨棒を締める。

「うふふ……お姉さんいっちゃった……」

「う、うう……い、いくって？」

「すっごく気持ちよくなるってこと。文ちゃんもいったよ、男の子は、イクと出ちゃうの……おキンキン汁が」

「あ、そうだ……玉が溶けて……」

「あらほんと？　どれどれ……」

「あうっ」

「あはは、立派なの、二個ついてまーす、まーす」

ぎゅむぎゅむと、太ももの付け根を熟女の温かい手に握られて思わず足を締めるが、何の防御にもならない。

「うふふ、まだおチン○ンは元気だけど……体はもう疲れたわね？」

息は荒いが、ぜいぜいいう力もない。

——何回もやれば、慣れて体力もついてきて、精力相応の回数可能になるよね。そのころには……うふふ、本当にいかせてくれちゃうかも。楽しみ。何年ご無沙汰って話だもんね、男にイかせてもらうのは。あー、世の中にや女が抱きたくて仕方ないキ○タマがブランブランしてるだろうに、なんでこんなミスマッチが起きるのかねえ。何かおかしいわ。

「あ、あうっ」

もみもみと、女の本能で睾丸を優しく揉みつつ考えごとをする熟女。顔を赤らめ、身動き取れないショタは爆乳に埋もれているしかない。

——やっぱりあれよね、身の程知らずに男をえり好みするカスがいるから男が委縮するのよね……っていうか、そもそも私結婚してるから、アグレッシブに来られても困るんだけど……っていうか、

私がお無沙汰だったのはやっぱりレス化するクソチ○ポ選んだからか……っというか……

ポロ、と急に涙をこぼすミホコ。

「クソチ○ポでももう一回会いたい……あ、いや、そうでもないか……別に会えないなら会えないで……」

「え……お姉さん、泣いてるの？」

「泣いてないよ。別に泣く理由ないしね」

「そう、そうだよ。僕だって別に泣く理由とかない」

泣く理由などない、というのは、「泣く理由がある」といつているのと同じだった。

本当に泣く理由がないなら、そんなことをいう理由がないのだ。

そもそも、ミホコが泣いているのを見て、僕だって、というのは、心の奥の方ではお互い泣くべき理由が同じようにあるとわかっているからだ。

だが、超能力で思考を操作され、それを封じ込められている。

シャワーを浴びる二人。

「ほら、こっち向いて」

すでに二度も本番をこなしたのだ、はずかしがる必要などないだろうと一緒に入るミホコ。

銀色のシャワーヘッドを持ち、文平に微笑みかける。特に狙ったわけではないが、爆乳が腕に挟み込まれてぼよよんと激しくも柔らかく変形する。

それを見上げて、顔を赤らめる文平。

「ん……あらあ、まあ、うれしいわ」

「え、あつ」

シャワー室に来るまでに萎えた巨棒が、再びギギンと反り返る。

顔を真っ赤にして爆乳から目を逸らし、手で巨棒を隠そうとする文平。しかしまさに焼け石に水、一割も隠せない。

「きゃははは！ 大きすぎて隠せな一い！」

「もう、やめてよ」

「あは、ごめんごめん。それじゃ、せっかく立ったんだから……っ、わけにもいかないよね。疲れてるもんね。それじゃ……」

手でシャワーの温度を確かめてから、巨棒の頭にかける。

「あつ」

ビクビク痙攣する巨棒が温水に包まれ、思わず目を瞑る文平。

シャワーを下げていき、ニマ、と笑ってずっしり二個玉に密着するほど近づける。熱くはない、圧力に目を剥く文平。

「はうっ！」

「きゃはは、シャワーでももしかして痛いかな？ 必殺シャワー金的！」

「い、痛くはないけど……驚くよ」

「うふふ、タマタマは男の子の一番弱いところだもんね」

いいつつ、しゃがむ。

「はい、これ持って」

「ん」

シャワーを渡し、透明のボトルを手取る。透明な液体が入っている。ローションだった。なんでも出てくるという箱に試しに注文したら出てきた。

——あの人と良く使ったローションなのよね。

手に出す。

ぬるりとした液体に巨棒につける。シャワーで濡らしていたのですぐに広がる。

——熱いわ、焼けた鉄棒みたい。

「あ、あう、ヌルヌルで気持ちいい……」

「あは、そうでしょ？ デ〇チン、首までぬーるぬる。ぶっとい生え際ぬーるぬる、ついでにきゅーしょにぬーるぬる」

「あう、あう」

腰を引き、下がる。そこそこ広い風呂だが、元々端に立っていたのですぐに背中がつく。

「ひゃっ」

「あは、冷たいでしょ？ 背中にシャワーかけて、うふふ、それじゃ……」

片手ではまわらない巨棒の茎を両手で掴み、ゆっくり上下させていく。

「それじゃ、気持ちよくしてあげるね。三回目だから、少しは……あ、あらあ、やだ、金ちゃんももう引きあがってる……」

「う、うう」

「やだわ、そんなに気持ちいいかしら？ 我慢できない？」

「だ、だってお姉さんのオッパイ良くみえるし、お姉さんがしてくれてるの見たら……あっ」

「うふ、いっぱいだして……うひゃあ！ す、すごいでるわ。今日三回目だよ？ どんだけ精力あるの……」

巨頭の首を優しく両手で掴みつつ、拳のような巨頭から放出される粘液を呆然と見る。視線を下し、ずーっと下し、さらに下ろしてようやく根本、そこから肉玉を見下ろす。

「うーん、この種馬ボールならこのぐらい当然かな？」

ドブドブと放出される粘液。目の前でしゃがんでるので顔面に掛かっても気にせず、べろりと長い舌で舐め取る。

「んふふ、こりゃ、この子が慣れてきたら体持たないかもね」

頬を引きつらせつつも、期待に胸躍らせる。

文平の局部のあまりの非凡さに、性に触れ始めた遥か昔に戻ったような新鮮な悦びを感じていた。

一方で、文平は仰け反り、涎を垂らしつつどうにか立っている。

出すだけ出すと、現金な巨玉が再びずしりと股の間にぶら下がる。

その根元で、ビンビンと異様な元気さで仰け反る巨棒。

しゃがみ、それを両手で掴んだままの熟女。

そこに感じる熟女の手の柔らかさ、温かさに不思議な安心感を覚えつつ、彼女とのやり取りの気持ちよさを思い出して反芻する。

——ああ、このおばちゃん凄すぎる……こんな気持ちいいこと次から次に。おかしくなっちゃう……おチン〇ンはこういう事のためについてたんだ……ついててよかった……

「ね、ねえお、お姉さん」

「うふふ、なに？ もう一回出す？」

「う、うん……っていうか、もっともっと、僕と遊んでね」

「ああ、もちろんよ。服着て遊ぶのも、脱いで今みたいに遊ぶのも……どっちもタップリしちゃおうね。もっともっと、いろいろ教えてあげるから」

「い、いろいろ？」

「そう、例えば……」

「例えば？ あっ」

ギュム、と優しく急所玉を両手の平で覆う熟女。

満面の笑みで、不安げな少年の顔を見上げる。

「睾丸マッサージとかね。コウガンっていうのは、男の子の最大の弱点、おキンキーンのこと！ほーれほーれ、タマタマモミモミー」

「あううう」

片手で片玉ずつ持つのにちょうどいいほどの巨玉。捧げ持つようにして、指でもぞもぞと刺激する。

不安げに見下ろしてくる少年の顔に嗜虐心をくすぐられつつ、優しく念入りに揉み解していく。

体験版終わり

この後も浚われ熟女に食われまくり、

サイボーグ系熟女に食われ、

クローン熟女千人に食われと、食われまくりの巨根ショタ。

続きは製品版でぜひお楽しみください。